

KYOTO Technical Site



商品に隠れている要素を見よ そこに新たなビジネスはある

取材・文/竹中 輝 (本誌) 撮影/三國賢一

過去、カラオケ店には様々な料理が登場したが、マニュアルに即した料理の域を出るものではなかった。彼らはそれを嫌い、ガッチャ東矢倉店ではホテルの厨房出身のシェフを雇うに至る。

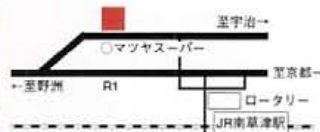
自らを「ダイニング・カラオケ」と称する店の、右下の写真は料理の一例。サーモンには水菜やミョウガ、レッドペッパーなど、和洋の香味をあしらった。鰹ダシをベースに煮込んだ大根、筍、菜の花の上ののった有頭海老はクリーム仕立てのソースで飾った。カラオケ店の厨房でシフォンケーキが焼かれている図を、一体誰が想像できよう。皆充分創作料理のレベル。カラオケ店にいることを忘れさせる出来であり、しかも1000円を越えるものはない。

お祭りの通り、次なるはダイニング・アウト、いわゆる外食事業が狙い。既に何軒かの飲食専門店を関西各地に展開しているが、その完成形がこの4月、JR南草津駅前にお目見えの予定だ。

目指すは一日中楽しめるアミューズメント・スペースの現出。そこには「既存の若者層への娯楽の提供」「味を楽しむ壮年層へのサービス」さらには「家族と食事をする機会が少ない子供達への線の接客」があるのだと。

自らもシェフであるレストラン事業部の松村次長は「要素要素だけのマニュアルによる接客を『点の接客』とするならば、質を問うサービスとは『線の接客』」だと言う。例えば西中島南方の系列店、ダイニングカラオケクラブ・Zero1の営業時間は朝5時ではなく朝8時まで。それは立地条件を鑑みた、始発ではなく、出勤時間に合わせた閉店時間という意味である。「社長は『シャワールームを設ける』なんていう注文までしてくる(笑)」そうだ。

レコードから皿へ。「真上から見たら丸い」という以外、一見、何の共通項もなさそうな商品へと移ったビジネスは、商品を隅々まで知る事で広がりを見せた好例と言えるだろう。



そして「ダイニング・アウト」に何が隠れているのだろうか?

「空オーケストラ」。これがカラオケの語源だと記憶している。昭和50年代中頃の家庭用8トラックが第一次、後にスナック等で楽しめるようになったレーザーカラオケによる第二次、そして老若男女を問わず楽しめるスタイルになった現在が第三次ブームであり、元号が平成に変わった頃に始まる。「カラオケクラブ・ガッチャ」というカラオケ店が誕生したのもその頃であった。

「家で聴く」レコードから「家の外へ出て歌う」カラオケへ。カラオケ文化が熟した時期の出店は、まさに満を持したもの。利用者を家の中から、外へ引っ張り出した、ビバーレコード第二の飛躍である。

カラオケ店は新たな時代へ。そして今、彼らはこのカラオケという娯楽の位置づけを変えんとしている。食事の後の二軒目、いい加減酔った後の騒ぎ仕上げ…。それはそれで楽しい利用の仕方だ。だがこのカラオケ店は、これまで同業者達が手を変え品を変え、こぞってチャレンジしたものの、未だ明確な成功例は聞き及ばない「一軒目に食事をしながらカラオケ」という未踏峰に挑んだ。

それはレコードと同じように、「歌う」「騒ぐ」などのカラオケという商品が持つ楽しさの中の、「食べる」という楽しさを特化したものに他ならない。

カラオケには「食事をする」という楽しみが隠れていた。

1971年、一軒のレコード店が河原町に現れた。今からちょうど30年前になる。かの「カップヌードル」が誕生した年である。流行ったテレビは「時間ですよ。」に「仮面ライダー」…。殆どの読者は記憶どころか影も形も無いだろう。

当時はもちろんタワーも、HMVも無い。大型店は十字屋ぐらい。そんな時代、このレコード店を立ち上げたのは当時22歳の青年だった。株式会社ビバーレコード現社長、春田幸裕。さてこの店、扱う商品を知ることで、後に大きな広がりを見せる。

一口に「レコード」といっても、その楽しみ方は様々。家に持ち帰りひたすら聴く者もいただろう。ギターを練習した者もいただろう。そして、「自分も歌う」という楽しみがレコードにはあった。そこに気づいた事が、まず一つ目のキッカケだった。

レコードには「自分も歌う」という楽しみが隠れていた。



取材協力*ダイニングカラオケクラブ・ガッチャ東矢倉店
滋賀県草津市東矢倉4-14-1 TEL.077・567・0775 営業時間11:00~翌5:00